

クライオプローブによる粘液栓除去が有用であったスエヒロタケによる アレルギー性気管支肺真菌症（ABPM）の一例

三崎裕美子、前谷知毅、森令法、野村奈都子、深田寛子、中村保清、北英夫
（高槻赤十字病院 呼吸器科）

77 歳女性

×年 10 月から喀痰と咳嗽が続くため近医を受診し肺野異常陰影を認めたため当院紹介となった。胸部 CT で粘液栓と気管支拡張を認めておりアレルギー性気管支肺真菌症（ABPM）が疑われ、気管支鏡検査を施行する方針とした。気管支鏡検査では気管内腔に粘液栓を認め、通常鉗子では採取除去ともに困難であったためクライオプローブを用いて粘液栓を除去した。アスペルギルス f1 IgE 抗体は陰性でありアスペルギルス以外の真菌が原因の可能性が考えられ、一般細菌、酵母ではほぼ実用化されている MALDI-TOFMS（質量分析）を用いたところ粘液栓から *Schizophyllum commune*（スエヒロタケ）を検出した。本邦ではスエヒロタケによる ABPM はアスペルギルス以外では最多とされるが、真正担子菌（キノコ類）の同定は一般医療機関では困難であり専門施設に菌種同定などを寄託することが推奨されている。MALDI-TOFMS が同定に有用である可能性も含め文献的考察を交えて報告する。